

# 令和8年度 亀田西小学校 いじめ防止のための基本方針

本方針は、いじめ防止対策推進法第十三条により、亀田西小学校におけるいじめの防止等のための対策を定めるものである。すべての児童が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、いじめを行わず、またいじめを見逃したり、放置したりすることがない学校を目指し、全教職員が一丸となって取り組んでいく。

## 1 基本的な考え

### (1) 教職員の姿勢

すべての児童を加害者にも被害者にもさせない。すべての児童がかけがえのない存在であることから、誰からも尊重され、一人一人のよさが生かされるように、日々の教育活動に専心する。その上で、「いじめは、どの学校にも、どの学級にも、どの児童にも起こりうる」という認識にたち、すべての教職員が高い人権意識をもち、児童、保護者、地域との信頼関係の上に、いじめの防止等に徹底して取り組む。「いじめ対応ガイドブック」による職員研修を行い、組織的にいじめ防止対策に取り組んでいく。

### (2) いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

(いじめ防止対策推進法第2条)

この定義より、事案が次の4つの要件に全てあてはまる場合に、いじめと判断する。

- ・加害者・被害者とも児童である。
- ・加害者と被害者が、一定の人的関係にある。
- ・加害者が被害者に心理的又は物理的な影響を与える行為を行っている。
- ・被害者が心身の苦痛を感じている。

### (3) いじめの理解

いじめの被害者・加害者は固定化されたものではなく、多くの児童が、あるときは被害者になり、あるときは加害者になるなど、入れ替わりながら被害も加害も経験する。

また、いじめが起こっているときには、いじめをはやし立てたり面白がったりする「観衆」や見て見ぬふりをする「傍観者」が存在することも多い。いじめの問題への対処や未然防止に努めるには、加害者にいじめをやめさせ、被害者・加害者の関係修復を行うだけでなく、観衆や傍観者も含め、集団の問題として扱うことも必要である。

いじめをしない、させない、許さないという雰囲気が集団全体に形成され、学校風土、地域社会の風土となることが、いじめの未然防止につながるものである。

## 2 いじめの未然防止

従来の予防的・課題解決的な指導から、児童一人一人の成長を促す指導により力点を置き、学校のすべての教育活動を通して児童の自律性と社会性を育み、人権意識を高める。

そして、いじめを生まない人間関係・学校風土づくりに努める。

## (1) いじめの防止

### ① 児童一人一人の成長を促す指導

多面的な児童理解に基づく信頼関係を基盤とし、全教育活動を通してすべての児童に〔自己存在感の実感を促進〕〔共感的な人間関係の育成〕〔自己決定の場の提供〕〔安心・安全な「居場所づくり」〕の4つの視点から自立を促す生徒指導を推進する。また、「新潟市授業づくりサポート」を活用し、上記の4視点を生かした授業づくりを通して児童の自己指導能力の育成に努める。

### ② かかわり合い、学び合う授業の充実

分かる授業・できる授業や、一人一人を大切にし、生かす教育活動により学級・学年・学校の風土をつくり、保護者や地域との信頼関係や協力体制を構築する。

### ③ 学級経営の充実

教師と児童の信頼関係をつくり、児童のよりよい学級づくりに取り組もうとする意欲を引き出し、学級の諸問題を自分たちで解決していく力を育てる。特にいじめや差別につながる言動を許さないという姿勢で児童に接し、児童の人権意識を高める。

教職員の言動が児童一人一人や集団に与える影響は決して小さくないことから、教職員一人一人が自身の発する言葉や振る舞いによって、いじめが助長されることや、いじめが発生しやすい雰囲気をつくられることのないよう、十分注意を払い、児童が安心して生活できる環境づくりに努める。

### ④ 特別活動の充実

学級活動や異年齢集団活動を通して、互いのよさを認め合ったり、助け合ったりする活動を充実させる。学校生活の中で子どもたち自身が問題に気づき、主体的にいじめ防止に取り組むよう、働き掛ける。

### ⑤ 児童への啓発と予防教育

小学校から中学校の各学年において、「新潟市いじめ未然防止に向けた教育プログラム」による学級活動と道徳の授業を計画的に実施し、児童のいじめをしない・させない・無視しない力を育成する。日頃からいじめのない集団作りに努め、相手を大切にする気持ちを育み、いじめ防止に向けた児童生徒の意識向上を図る。

### ⑥ 児童理解・職員の研修

子どもを語る会等の児童理解研修を実施し、児童に関して共通理解を図ると共に、全職員で見守りながら日々の情報交換を密にし、全教育活動を通して支援・指導を行う。

また、発達障がい、外国人児童、性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童、経済的理由や家庭の状況等により配慮が必要な児童に係る教職員の資質向上のために、校内研修を計画的に実施するとともに、教育委員会等が主催する研修会への教職員の積極的な参加を促す。

### ⑦ 保護者や地域との協力体制

授業参観や懇談会でいじめ防止に関わることを話題として、保護者とともがいじめ防止について考える機会をもつ。また、たより等でも情報を発信し、保護者や地域と連携しいじめ防止等に徹底して取り組む。

## (2) いじめの早期発見

いじめは大人が気付きにくく、判断しにくい形で行われることが多いことを教職員は認識し、ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階からの確に関わりを持ち、いじめを隠したり軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する。

### ① 子どもとの信頼関係

日頃から児童をよくみる、話をよく聴く、寄り添う、かかわる、毎日必ず笑顔で話しかけたり名前を呼んだりほめたりするなどを積み重ね、児童との信頼関係構築に努める。児童の話を丁寧に聴き取り、その後の対応についても児童の意向を汲みながら児童と一緒に考え、安心感をもたせる。

### ② アンケートの活用

いじめ等に関するアンケート調査を年間3回実施し、児童の変化に気付き、いじめの未然防止と早期解決に努める。原則として下記に留意し対応する。

- 書かれたアンケートの内容については、学校が責任をもって受け止め、必ず対応することを実施前に伝える。
- アンケートは目的に応じて記名式・無記名式の選択をし、周りの目を気にすることのないよう調査用紙や記入場所等工夫し、安心して記入できる環境づくりに努める。
- 原則として調査を実施した日のうちに、複数の教職員の手で記入内容を確認する。
- 調査用紙（原本）は子どもが卒業するまで保管し、調査の結果まとめた資料等は子どもの卒業後5年間保存する。
- 解決に向けての見守りと事後支援

### ③ 教育相談の実施

原則として、アンケート調査の実施後に、担任と子どもが対面して話をする「ふれあいトーク」を実施する。調査の内容の他、学習や友だちのこと、心配なことなどを話し合う。

### ④ 情報の収集と整理

アンケート調査、教育相談、日々の教職員による見守り、児童や保護者、地域からの連絡等（放課後、SNS等インターネットでのトラブルを含む）、情報を収集整理し、早期に組織的に対応できるようにする。

## (3) いじめへの対処

### ① 迅速で組織的な対応

いじめを認知したら、特定の教職員で抱え込むことなく、速やかに組織で対応する。いじめを認知した教職員から、学年主任や生活指導主任を経て管理職に確実に報告が上がる校内体制を整える。認知後は、速やかに「校内いじめ対応ミーティング」を開催し、解決に向けた方針と手順を決定し、共通理解を図るとともに、多方面から情報を収集、整理し、全体像を把握する。

なお、いじめが疑われる事案についても、いじめが起こったものとして対応し、特定の教職員が安易に「いじめではない」と判断しない。いじめの認知は事実を丁寧に把握した後、複数の教職員で組織的に行う。

加えて、暴力行為やいじめに対しては断固たる姿勢で対応することが必要であり、事案によって警察等と連携した対応をためらわない。

## ② 解消までの指導・経過観察・再発防止

いじめを受けた子どもに対しては、気持ちに寄り添いながら、一緒に考えるとともに「絶対守る」という姿勢で、事実の把握・心のケア・保護者への説明等、いじめられた子どもの不安を解消するよう迅速に対応する。

いじめを行った児童に対しては、解決を急ぐあまり児童の十分な反省を引き出さないまま安易な謝罪で終わらせることなく、相手の心の痛みを理解させ、自身の行為の問題点についての内省を促す。また、今後の生活の仕方を考えさせ、自己決定させるとともに、本人の不安定要因への対処を行い、必要に応じてＳＣにつなげたり、関係機関と連携したりして家庭環境への支援を継続する。

その際、「解消」とは、いじめがなくなることはもちろん、再発についての心配も全くなく、しかもいじめをうけた子どもの心の不安が完全に払拭された状態である。解消後も、子どもの様子をよく観察して再発を防止する。

周囲の児童に対しては、自分事として問題をとらえ、いじめの観衆や傍観者にならず、いじめを未然に防ぎ、止めさせるために一歩踏み出す勇気もてるようにする。

## ③ 保護者への対応

いじめを認知した場合、いじめを受けた児童やいじめを行った児童の保護者に対し、経過や事実、今後の方針を丁寧に説明する。

# 3 組織

## (1) 校内いじめ対応ミーティング

発生したいじめに対し、校内で迅速・適切に対処することを目的とする。構成メンバーは、管理職、生活指導主任、いじめに関係する児童の学級担任・学年主任、その他事案に関係する教職員が必要に応じて加わる。

この組織は、学校がいじめの防止等、特にいじめの対処に取り組む際の中核として、日常的に機能させ、いじめが発生した場合、次のことを行う。

- いじめの状況を組織として共有
- 事実把握のための調査
- 対処のための方針や方法の協議
- 児童への指導
- 事案に関する記録

## (2) いじめ対策委員会

いじめの防止等の課題に対して、学校内外の人材がそれぞれの役割や専門性を発揮して、組織的・実効的に取り組むことを目的とする。構成員は校長・教頭・主幹教諭・生活指導主任・養護教諭・特別支援教育コーディネーター・当該学年主任・当該学級担任を原則とし、必要に応じて他の職員や地域人材としてスクールサポーター、コミュニティー協議会安心安全部員、スクールカウンセラーなどを加えて行う。

会議は、必要に応じ随時開かれるものとする。

## (3) 亀田西中学校区いじめ防止連絡協議会

中学校区の学校、保護者、地域の代表等が連携して、中学校区全体のいじめ防止等への取

組について協議することを通して、地域全体で児童をいじめから守る取組の充実を図ることを目的とする。

構成メンバーは、地域コミュニティ協議会・青少年育成協議会・民生委員・児童委員・PTA・スクールカウンセラー・教職員等の代表とする。

#### 4 その他

毎週火曜日に、児童の情報交換を行い、各学年で起きた生徒指導上の事案を共通理解し、いじめの早期発見につなげる。

#### 5 年間の予定

(1) いじめの早期発見のための方策

①子どもとの信頼関係 ②アンケートの活用 ③教育相談「ふれあいトーク」 ④情報収集と整理

《「児童理解（いじめ）アンケート」と教育相談「ふれあいトーク」の流れ》  
(迅速な対応で)

時	児童への指導	教師の対応
年3回 (5.10.1月) アンケート、教育相談実施後、速やかにミーティングメモ記入	・アンケート実施 ・ふれあいトーク (全児童対象) *時間設定はモジュールの時間に設定。場所は廊下や特別教室等工夫する。	1 <u>アンケート実施後、名簿順に並べ、担任が目を通した後、聞き取り等することなく、すぐに教頭先生に提出。</u> 2 教頭と校長が確認ののち、学級担任に返却。 3 ふれあいトークタイムで聞き取りをする。 4 ○を付けている児童について聞き取りをした内容を、教頭、学年主任に報告し、判断を仰ぐ。 5 ○を付けている児童のアンケート用紙は、コピーをして1部生徒指導部(生活指導主任)に提出する。 6 「いじめ」認知の場合 教頭：「校内いじめ対応ミーティング」の用紙に概略に記録する。 校長：重要度(高・中・低)の判断を行う。 学年主任：いじめを受けた児童やいじめを行った児童の保護者に対して適切に事実を説明する。 指導・対応の経過を把握する。

※「児童理解(いじめ)アンケート」の保管について

- ①学年でまとめて生徒指導部から配付された封筒に入れる。
- ②学級名簿順に並べる。一番上に学級名簿を付ける。
- ③校長室の廊下側スチールロッカーに入れる。
- ④アンケートの保存期間は、在学中。

※「校内いじめ対応ミーティングメモ」原簿は卒業後5年保存。

(2) 年間アンケート・教育相談計画

目 的	5月26日～6月5日	10月27日～11月13日	1月18日～29日
いじめ調査 ↓ 児童理解 「ふれあいトーク」 ↓ 記録・保存 対応	児童理解(いじめ)アンケート① ふれあいトーク ・いじめ対応ミーティング メモ記入	児童理解(いじめ)アンケート② ふれあいトーク ・いじめ対応ミーティング メモ記入	児童理解(いじめ)アンケート③ ふれあいトーク ・いじめ対応ミーティング メモ記入
児童理解 ↓ 保管	スチールロッカーに保管	スチールロッカーに保管	スチールロッカーに保管

(3) 児童に行う指導及び教職員の研修

①児童に行う指導

- ・「いじめ未然防止に向けた教育プログラム」 4月中に各学級にて授業実施
- ・「自殺予防のためのSOSの出し方指導」 4・5・6年生で授業実施
- ・「SNSを含む情報モラル指導」 各学級にて授業実施
- ・「生命(いのち)安全教育」 各学級にて授業実施

②教職員の研修

- ・「生徒指導いじめ対応ガイドブック」研修 (4月・8月・12月を目途に行う)